

# 初期学校衛生雑誌の考察 —学校衛生研究会『学校衛生』と 大日本学校衛生協会『日本学校衛生』—

高橋 裕子

保健体育講座（学校保健）

## A Study of the Earliest School Hygiene Magazines Introduced in 1903 and in 1913

Yuko TAKAHASHI

Department of Health and Physical Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

### 1. はじめに

学校衛生の歴史は、明治期の医学的学校衛生から出発して、大正期の社会的学校衛生を経て、昭和期の教育的学校衛生に至る特徴をもつと言われている<sup>(1)</sup>。ただし、これは政府の学校衛生制度の整備に注目した歴史である。この発展史を相対化するために、筆者はこれまで学校現場に視点を置いて検討することを試みてきた<sup>(2)</sup>。本稿では、学校衛生を組織的に推進する団体に注目することによって、新たな相対化を目指してみたい。

これまで学校衛生を扱う雑誌については、半官半民の立場から明治期の衛生機構の確立に寄与した大日本私立衛生会の『大日本私立衛生会雑誌』（明治16年6月創刊）と、文部省の外郭団体ともいえる帝国学校衛生会（大正9年12月発足）の『学校衛生』（大正10年5月創刊）が取り上げられてきた<sup>(3)</sup>。しかし、その発足が両者の間にある、初期学校衛生専門団体の機関誌については<sup>(4)</sup>、素描されることはあっても、誌上の議論にまで踏み込んだ検討はなされていない<sup>(5)</sup>。それは次の二雑誌である。

・学校衛生研究会の『学校衛生』

創刊～第3巻第1号

（明治36年5月～明治38年9月、1903～1905）

・大日本学校衛生協会の『日本学校衛生』

大正2年3月1日発会

創刊～第29巻第3号

（大正2年4月～昭和16年3月、1913～1941）

本稿がこの二雑誌に注目する理由は、機関誌名に学校衛生を掲げているからである。特に、前者の『学校衛生』（学校衛生研究会）は、これまで教育的な側面が

あった点が指摘されている<sup>(6)</sup>。とすれば、これまで医学的学校衛生とされる明治期において、すでに、教育的な発想をもつ学校衛生専門団体が組織され、活動していたことになる。本稿では、この二雑誌の検討を通して、学校衛生史の新しい方向性を明らかにしてみたい<sup>(7)</sup>。これによって、昭和期の教育的学校衛生を説いた中心人物である大西永次郎や竹村一との思想的な繋がりも見えてくるだろう。

### 2. 専門二団体の雑誌発刊と位置付け

#### （1）学校衛生研究会『学校衛生』

##### 1）設立者、経営者と雑誌の編集発行人

『学校衛生』誌の編集・発行人は、次の通りである<sup>(8)</sup>。

第1巻第1号～2号：編集兼発行人：鈴木昇

第1巻第3号～第2巻第7号

：編集発行人：原田長松

主 幹：原田長松

主 筆：関以雄

第2号第8巻～第3巻第1号

：発行人：樋口堪次郎

編輯者：関以雄

設立者は、原田長松という人物である<sup>(9)</sup>。同時代の本図晴之助は、「経営者の原田氏は相当に資金もあった」と述べ、経営を担ったのは原田だとしている<sup>(10)</sup>。本図とは、本稿が二つ目に取り上げる『日本学校衛生』誌を担った人物である。

設立者・経営の中心であり編集発行人でもあった原田の履歴については、嶋谷充子が明らかにしている<sup>(11)</sup>。そこから、編集者としての背景にかかわる略歴を示すと次の通りである。

明治2年8月 鳥取県気高郡生まれ（平民）  
 19年12月 鳥取県尋常師範学校入学  
 23年6月 同上卒業後、今市尋常小学校の訓導と校長を兼任  
 25年8月 高等師範学校在学のため、同上休職（26年8月休職満期退学）、  
 28年3月 高等師範学校理化学科卒業（尋常師範学校、尋常中学校、高等女学校の教諭免許取得）。静岡県尋常中学校韮山分校の教諭  
 32年3月 東京府高等女学校教諭  
 33年4月～35年3月 茨城県師範学校教諭  
 36年5月 学校衛生研究会『学校衛生』創刊  
 38年3月 長野県師範学校教授（在職のまま、41年8月清国政府の招聘で、清国湖南省優級師範学堂教習）  
 44年11月 帰国。鳥取県米子中学校長兼教諭  
 大正8年4月 明治学院教授  
 10年4月 東京府視学員  
 11年3月 東京府豊島師範学校教諭  
 12年11月 東京府立第二中学校の第四代校長（昭和3年3月退職）

日本初の学校衛生専門雑誌『学校衛生』が、学校衛生の専門家や学校医ではなく、高等師範学校の理化学科を卒業し、師範学校教諭などを歴任した人物によって創刊されたのは、極めて特徴的である<sup>(12)</sup>。

## 2)『学校衛生』の編輯方針と寄稿者

「学校衛生編輯局」は、創刊号において、学校衛生家、教師、学校医からの寄稿を積極的に歓迎すると伝えている。相当の原稿料を準備しているともいう。

- 一、本誌は学校衛生の普及発達を謀るを体とし、兼ねて一般衛生思想の喚起に努力せんとす。
- 一、本誌は学校衛生家、学校教師、学校医諸君の寄稿を歓迎す。
- 一、本誌に掲載したる主稿に対しては乍失礼、相当の原稿料を贈呈す、通信等も亦同じ。
- 一、本誌は購読者諸君の学校衛生に関する質義の解答をなすべし

明治三十六年五月

東京市芝区南佐久間町二丁目十八番地

学校衛生編輯局

（学校衛生編輯局「謹告」『学校衛生』第1号、明治36年5月）

さらに、「購読者諸君の学校衛生に関する質義の解答をなすべし」という企画には、学校衛生家、教師、学校医などの異なる立場から学校衛生に関わる人々の活発な議論の場にしたいという方針が現れている。

## （2）大日本学校衛生協会『日本学校衛生』

### 1）設立者と経営の中心

杉浦守邦は、この会は会長に北里柴三郎、副会長には三島通良など著名人をそろえているが、「実は常任理事であった本図晴之助（もとずせいのすけ）個人の力によって設立され、維持された会であるといった方があっている。雑誌「日本学校衛生」も彼の執念によって続けられた」と指摘している<sup>(13)</sup>。本図の詳しい履歴ははっきりしないが、「東京師範学校」を卒業し、校長を最後に退職した教員・教育者である<sup>(14)</sup>。

### 2）編集方針と寄稿者

「寄稿要領」欄には、「本誌は一部少数の専有物には無之、会員相互の研究機関に候へば、どし〜、御寄稿下され度候」と記され、研究交流のための開かれた場としたい旨を伝えている<sup>(15)</sup>。同時に、「御各自が一名づゝ入会者の御勧誘願度其結果は忽ち会員倍增する訳にして」と積極的に会員増加を図っている。「雑報」欄には、全国各地の府県・市郡単位の学校医会、学校衛生会の発足や活動報告、講習会の開催報告が数多く掲っていて、医師会での学校医に関する議論も掲載されている<sup>(16)</sup>。全国各地の地方単位の会組織の活動が概観できるほどである。次節から、この二誌の内容を、冒頭に述べたように教育的な発想に注目して分析して行こう。

## 3. 学校衛生研究会『学校衛生』の分析

『学校衛生』の発刊意図は、「発刊の辞」（『学校衛生』第1号、明治36年5月）に示されている。それによると、第一に、「衛生と教育」とは「国家経綸の大本」であるという関係、第二に、「開明国」では、国民は「健康」によって「無上の幸福」「不動の財産」「終天の快樂」に達するという幸福論が説かれている。この二つの考えの下で、「国家」は進歩しなければ国民は健康になれず「不愉快に沈淪」と述べている。つまり、国民の幸福は健康あつてのことで、健康と国家の進歩とは相互関係にあるというのである。これを前提に、『学校衛生』誌を完美するのは、「健全なる第二の国民を養成」することを望むからであり、教育が「健康の一部を犠牲」にしている「余弊を済」うために発刊するという。

このような『学校衛生』誌の掲載内容のなかで、注目すべき教育的発想は三つある。第一は、衛生の教育は修身教育の一部であって、教師が担当するという考え、第二は、衛生は科学の応用であって、普通教育で科学的知識を教育すべきという考え、第三は、師範教育では衛生学を拡充すべきという考えである。以下、それぞれについて検討してみよう。

## (1) 衛生の教育は修身教育の一部で教師が担当するという考え

『学校衛生』の巻頭言は、衛生教育では、教師と医師がどんな役割をもつかを述べて、「身体の健全は少年が立身出世の大根源」であるから教師は衛生の「細故に渉るまで」示教するのは緊要、とした上で、教師の指導すべき衛生は、あくまで、「普通心得置くべき衛生上の事柄を修身事項の一として会得せしむること」だと説いている。理由は、学校医は健康を「司掌」するのに対し、「教師は学校衛生を講明し且つ普及」する役割にあるからだという<sup>(17)</sup>。面白いのは、教師が「衛生通」を望んだり、医者が「教育通」を欲してはならず、あくまで「相協議し相諮詢し以て衛生の普及を企図」することが重要、として、「教師は教師たり、医者は医者たり」とはっきりと区別している点である。

抑も衛生なる思想の啓発と、其知識の進歩とに就ては特に之を小学校教師に待たざるべからずとは、蓋し吾人の私言にあらずして（中略）輒近我邦に於ても、（中略）衛生思想の啓発并に其知識の進歩を求むるの切なる、遂に之が素養修練を学校教師に望むものは日に多きを加ふるに至れり。

惟ふに衛生と修身とは相乖離するを許さざる所の学科にして、衛生とし謂へば修身を意味し、修身と謂へば衛生を包含するは蓋し本邦古来の教育法なりとす。（中略）元来修身なる者は、読んで字の如く各自の身を修むるが為に設けられたる学科にして、特に小学校に於ては（中略）第一に少年の衛生に就て自から衛り自から行ふ所を指導するを以て教育の要訣とせざるべからず。（中略）況んや身体の健全は少年が立身出世の大根源なれば、衛生上の事項は其細故に渉るまでも、教師としては一々之が示教を為すべきは頗る緊要の事と謂はざるべからざるもの存するに於てをや。然れども教師は医者たるべきものにあらざれば衛生通たることを望まざるなり。医者は教師たるべきものにあらざれば教育通たるを欲せざるなり。教師は教師たり、医者は医者たり。相協議し相諮詢し以て衛生の普及を企図することこそ望ましかれ。なんとなれば学校医は健康を司掌する所の人材にして教師は学校衛生を講明し且つ普及する所の責任者なればなり。故に学校教師の教訓すべき衛生、指導すべき衛生は、普通心得置くべき衛生上の事柄を修身事項の一として会得せしむることに努むるを欲して止まざるなり。（巻頭言「衛生教育と修身教育」『学校衛生』第1巻第2号、明治36年6月）

教師と医者それぞれが、衛生教育に寄与すべきだという論説は他にも数多くあるが、ここでは、教師に向けた論説を見ていこう。

教師には学校衛生を講明する職責があるのに、「学校教師并に学校監督者の衛生的知識に乏しきは実に驚くの外なし」と嘆く論説がある。続けて次のように言

う。

如斯学校監督者、及学校教師にして既に衛生的思想を欠き衛生的知識に乏しきものとせば、茲に教育されたる学校生徒、即ち小国民は勿論衛生思想に欠乏すべし。此の衛生思想に欠乏せるもの後に大国民となり、廻り廻りて学校監督者となり、学校教師となり、其他市町村の役人となり、代議士となり、官吏となるに至らば、例つまでも国民の衛生思想は暗黒にして恰かも鶏卵に時夜を告ぐるを求むるが如く（中略）奚んぞ夫れ心細きの限りならずや。（中略）蓋し、衛生は修身の一部なればなり。吾人は切りに希望す。各学校に於て医師をして衛生上の講話をなさしめ、生徒の衛生思想涵養に尽力せられんことを。我が衛生を根本的に発達進歩せしむる所以の道は実に今や学校医并に一般医師の熱心に望まざるべからざるの現況に催促せられ居れるなり。教授管理の方法に攷々として其職責たる学校衛生を講明するに遑まなきの諸氏に之を請託するとは又無理なりと謂ふべき歟。（巻頭言「学校衛生と衛生講話」『学校衛生』第5号、明治36年9月）

学校の監督者や教師の衛生知識の欠乏は、「小国民」、つまり次世代に引き継がれるわけで、これではいつまでもたっても、国民の衛生思想の進歩は、「鶏卵に時夜を告ぐるを求むるが如く」心細い限りだと悲観している。ここでも先の巻頭言と同様、「衛生は修身の一部」と考えられている。

また、別の論説では、衛生の学科とは、単に健康の維持増進を図るのではなく、個人には「公德心」の発達、公衆には「個人に対する保護」という「情感」を発達させる「性質」の科目であるから、「一種の精神的訓育」として「唱道」する価値がある、と説かれている。

衛生なる学科は、素と是れ国民の健康を維持し、且つ之れを増進するの謂に過ぎざるべしと想ふ人もあらかんか、決してそーばかりではない。詳かに之を観察すれば、個人にとりては一面に公德心の発達にも干与し、公衆にとりては亦一面に個人に対する保護と云ふ情感をも発達せしめ得る性質を備へて居る。だから、衛生なる学科は一種の精神的訓育として唱道するの価値があると想ふ。（中略）人類は諸動物の最高位に居る所の群集的生存の種族であつて、生理的機能も之に充分すべき発達とに経過に依つて規定し來つたものである。（中略）蓋し道德なる本源は衛生だと云つても妄言ではなからう。（天籟道人<sup>(18)</sup>「衛生と道德」『学校衛生』第1巻第3号、明治36年7月）

ほかにも、「健康」、「良習慣」や「国民の健全」、「衛生思想」の普及は、「道德」、「德育」や「徳性」の修養の問題だという立場をとる論説がいくつもある<sup>(19)</sup>。

衛生や健康の向上のための、教育の必要性が盛んに議

論されている点では、これまでの学校衛生史から見れば、きわめて先駆的といえる。ただし、ここまで検討してきたように、『学校衛生』誌上の「衛生教育」の多くが意味していたのは、衛生は「修身」の内容であり、「道徳」や「公德」の育成とも通じるという考えである。また、教師と医師の対比の中で、教師が担うのは、あくまで修身としての衛生であり、「衛生通」を望んではならない、とも考えられている。

## (2) 衛生は科学の応用、普通教育で科学の知識を教えるべきという考え

前節で見たように、衛生は修身であるとする論説が数多くあるなかで、「修身」では足りない、もともと衛生は「科学の応用」であると説く論説は注目すべきである。これは、大日本私立衛生会という別機関の総会の講演記録ではあるが『学校衛生』の編集者は、最新知見を素早く取り入れて、紹介しているのである。この記録は、その機関誌『大日本私立衛生会雑誌』には見当たらないので、少し長いが全体を見てみよう<sup>(20)</sup>。

抑も衛生の業たる精密なる科学の応用に依りまして吾人の生命を防衛するものでございます。之れが一般施設と云ふものは既に世人が通曉する所でありまして、而かも真に衛生の普及を計るの方法と云ふものは今後の事業的施設に存せずして国民各個の精神的に於て衛生的思想を以て防衛するにあること、信じます。(中略)

想ふに此国民的衛生一此国民の衛生の思想と云ふものを最も完全に発達せしむるの方法と云ふものはどう云ふ所に依って起こされやうかと云へば普通教育として強制的に幾分か此衛生のことを教へるやうになりましたならば甚だよからうと思ひます。今日常に小学校に於きまして修身の中とか云ふやうなものに於て僅かばかりは話しをするやうになって居りますけれどもそれだけでは足りないのであります。既に諸君もご存じの通りに学校には校医と云ふ者を今日は文部省令に於て置かねばならぬやうになって居る。是等の人をして時々「アルコール」の害と云ふものはどう云ふものであると云ふやうに、即ち小学校に於て専門の知識を有って居る人が話して教へると云ふやうになりましたならば、大に習慣性を為して漸々学校の進むに従つて此衛生知識と云ふものは進んで来やうと思ひます。(中略) 小学校を経過し中学校に移ると云ふやうになりました際には、少し高等なる摂生法であるとか生理学であるとか、伝染病の予防に関する等の知識等を備へしむるやうにしましたならば吾人の所謂国民衛生事業の設備は初めて効力を奏すること、私は信ずるのであります。小学校は追々是等の話が分かる時代から話をして進んで中学校其他の学校に於て普通教育を受ける所に於て、物理学博物学の上に於いて生理学及

衛生と云ふやうなものは学校医をして之に係せしめて教るやうになりましたならば斯道の進歩することは疑いないこと、思います。斯の如くして衛生の知識を授けたならば居住衣服飲食に至るまで自ら身体の營養に関する必要の事項を解釈して能く服膺するやうに至ると思ひます。(山根正次「普通学に衛生の一科を加ふるの必要を論ず(大日本私立衛生会総会席上演説の梗概)」『学校衛生』第3巻第1号、明治38年9月)

この内容から、具体的に注目すべき考えをあげよう。次の七点である。

- ①もともと「衛生の業」は「科学の応用」によって「生命を防衛」するものである。
- ②衛生を普及する方法は、今後の「事業的施設」ではなく、「各個」の「衛生的思想」によって防御することにある。
- ③学校医など専門家が、衛生の知識を「普通教育」において「強制的に」教えることが「衛生の思想」を「最も完全に発達せしむるの方法」である。つまり衛生知識を学校教育(中学校)の必修にすることを提案している。
- ④「衛生の知識を授けたならば居住衣服飲食に至るまで自ら身体の營養に関する必要の事項を解釈して能く服膺するやうに至る」。
- ⑤小学校、中学校と段階的に進め、中学校では、伝染病予防の「摂生法」「知識」「生理学及衛生」を教える。
- ⑥さらに、「物理学博物学」という教師の行う科学教育と、学校医からの「生理学及衛生」教育を関連させれば、このような段階的な学習はさらに「進歩」する。
- ⑦学校教育で、生徒たちが伝染病予防などの知識を備えるようになると、「国民衛生事業の設備」は始めて効力を奏する。衛生の普及は、衛生事業設備と人々の予防知識の両輪が必要だと考えている。

殊に④点目は、「知識」を授ければ「解釈」し「服膺」に至るという認識の関係をとらえている点は、現在の健康教育の根幹ともいえる議論に通じていて、注目すべきである。衣食住を整え、「自ら身体の營養に関する必要の事項を解釈する」という国民的課題を、前節で見たような、「修身」で扱う人間の徳の問題ではなく、知識の問題ととらえ、知識こそが衛生教育の要であり、解決策だと考えている。科学知の人間像と、公德の人間像とは極めて対照的である。もちろん、両者の当否を問うことはできない。また、⑤点目の、子どもの発達に沿った学習過程を思い描いている点、⑦点目の衛生の知識教育と政策の関係を見据えている点も注目すべきである<sup>(21)</sup>。

### (3) 師範教育で衛生学を拡充すべきという考え

前節で見たように、衛生教育の重要性は、修身教育—科学知識の両視点から指摘されていたのであるが、さらに、後者の課題意識と同調するように、師範教育では「衛生学」をもっと学ばせるべきだと説く指摘が、この雑誌の創刊号の時点からいくつも見出せる。

たとえば、新潟県の学校衛生技師は、教師の衛生的知識の乏しさが学校医の職務に悪影響を与えている、と指摘し、師範学校での衛生科目の増加と、夏季講習会における衛生科目の必須化を提案している。実際、自ら、ある夏季講習会において「細菌学大意、解剖及生理学大意、救急療法、衛生学大意、消毒及清潔法、伝染病大意」を講述したと述べている<sup>(22)</sup>。

校長教師等が衛生的知識に乏しい。之れが校医の職務を執行する上に於て大に不良の影響を与へるものである。(中略)師範学校其他の学校に於て、教科中に今一步を進めて衛生の事柄を増すが良い。且一面に於ては年々開催さるゝ夏季講習会には必ず衛生の科目を加へ現に教職にある者に対して其知識を注入するが適当であらう。予は、或地方に於て之を実行したが其時講述した科目は細菌学大意、解剖及生理学大意、救急療法、衛生学大意、消毒及清潔法、伝染病大意等であつた。(新潟県技師 鈴木恒次「学校衛生に就て」『学校衛生』第1巻第5号明治36年9月)

また、愛媛県と秋田県の医会が、師範学校の教科の中に「衛生学」を設置するよう知事に建議したことを報じ、「美挙」だと評価している<sup>(23)</sup>。

本節で見てきたように、『学校衛生』誌上の衛生教育に関する議論では、修身の内容として教師が教えるという考えと、科学としての衛生知識を普通教育で教えるべきという新しい考えが認められる。衛生の知識教育と政策の関係も含めて説かれていた。さらに、師範学校や夏季講習会において衛生学関連科目を拡充すべきという教師教育の議論があった。

## 4. 大日本学校衛生協会『日本学校衛生』の分析

『日本学校衛生』創刊号には、発会式(大正2年3月1日)<sup>(24)</sup>における、内務大臣原敬、文部大臣奥田義人、帝国教育会長辻新次からの祝辞が掲載されている。本誌創刊の意味も、この三編の祝辞に通じる意味に外ならないという<sup>(25)</sup>。なかでも、三編目の辻新次(1842～1915年、天保13～大正4)<sup>(26)</sup>の祝辞には、この会の方向性がよく現れている(帝国教育会長 男爵辻新次「祝辞」『日本学校衛生』第1巻第1号、大正2年4月)。

辻の祝辞での陳述に現れた発会意図は、二点である。第一は、「教育家ト医家ト相提携シテ国家及び個人ニ対シテ最モ緊切ナル学校衛生ニ関スル問題ヲ討究スルノ会合」を組織すること、第二は、それによって会員は「協心戮力理論ノ研究ヲ勉メ、實際ノ方法ヲ講ジテ、

大ニ学校衛生ノ改善振作ニ貢献スル」ことである。辻は、これまで、日本や他の諸国には、学校衛生の「学理」と「実際」を発達させたり普及する組織はなかったと指摘し、ドイツには「衛生万国会議」や「独逸公共保健協会」があつて、青年の健康と学校衛生の事を討究し、「独逸普通学校衛生会」や「独逸教員会児童研究会」などは「学校衛生ト青年児童ノ体育」を研究している、と述べている。辻は、そのような専門組織の役割を、この大日本学校衛生協会に強く期待しているのである。辻の期待通り、創刊五年目には、「実際教育衛生家の学校衛生論壇」たる存在だと評価されている<sup>(27)</sup>。

このような『日本学校衛生』誌の内容において、学校衛生史上、注目すべきは、第一に、教育権保障の視点からの学校衛生論である。第二は、早い時期にアメリカ健康教育が紹介されていることである。

### (1) 教育権保障からの学校衛生論の萌芽

創刊号と第二号には、乙竹岩造の発会招待講演が連載されている。ここで、乙竹は、「学校衛生ト関係アルト考フル所ノ特殊教育」について、次のように説いている。

今日並将来ニ向テ最モ必要ナルコトノ一ハ、未成年者ノ発達並ニ養護ニ対スル医家ト教育家トノ充分ナル協力ト云フコトデアルト信ジマス。(中略)

一体特殊教育ト云フコトハ、動モスルト或ル特志ノ方ガ特殊ノ憐レナモノニ対シテ加ヘラレル一種慈善的ノ教育デアルト云フ風ニ狭ク考ヘラル、傾キガアルヨウデアリマスガ、私ハ此ノ意味ハ餘リ狭隘ニ失シタ考デアルト思ヒマス。私ハ寧ロ特殊教育トハ其心身ニ特殊ノ事情ヲモツテ居ル所ノ未成年ニ対シテ国民必須ノ教育ヲ加フルコトデアルト斯克解釈スベキモノト信ジテ居リマス。即チ国民道德ノ大義ヤ日常必須ノ知識技能ハ從ヒ盲聾啞デアツテモ、低能白痴デアツテモ皆授ケラレ無ケレバナラヌモノデアルト思フ。併シ心身ニ特殊ノ事情ヲ有ツテ居ルモノデアルカラ其ノ事情ヲ顧慮シテ特ニ注意セラレタル方法ヲ以テ之ヲ教育スル。ソコニ特殊ト云フ意義ガアルノデアル。(中略)

尤モ此ノ特殊教育ハ從來ハ動モスルト其効果ガ疑ハレタ様ナコトモゴザイマシタ併シ最近教育ノ研究ガ一方生理的方面カラト他方心理的方面カラト、即チ教育上ナリ医学上ナリカラ、段々ト進ンデ来タ結果其ノ効果頗ル偉大ナルコトガ次第二明ニナツタノデアル。之レニ就テハ学理ニ亘ル事柄ハ色々ゴザイマスルガ併シ昔カラモ論ヨリ証拠ト云フコトモアリマスル通り、今日ハ証拠即チ二三ノ事実ヲ挙ゲテ議論ニ代ヘヤウト思ヒマス。(中略)其三ハ有名ナヘレンケラー嬢ノ事実デアリマス。(以下略)(東京高等師範学校教授 乙竹岩造「特殊教育問題」『日本学校衛生』第1巻第1号、大正2年4月)

乙竹が、特殊教育と学校衛生は関係すると考える第一の根拠は、医師と教育家が協力して当たるべき教育領域だという点である。開口一番に、最も必要なことは「未成年者ノ発達並ニ養護ニ対スル医家ト教育家トノ充分ナル協力」だと述べているからである。第二の根拠は特殊教育の意義である。乙竹は、心身に「特殊ノ事情」のある未成年に「国民必須ノ教育」を行うことが特殊教育であり、特殊という意義は、事情を「顧慮」し特に注意する方法によって教育するところにあると説き、この意義の点で、学校衛生と共通すると考えているのである。

この見方は、明治期の学校衛生を担った三島通良の『学校衛生学』（明治26年）にはなかった点である。確かに、三島は「病体畸形製造所」「学校病」と述べて学校教育の弊害を指摘し、教育環境や授業時間の整備を説いた<sup>(28)</sup>。ただしこの三島の学校衛生論は、「有用の人を作る」という富国強兵策に沿う教育目標論の下で説くものであった<sup>(29)</sup>。このことから、乙竹の招待講演から明瞭になったのは、「国民必須ノ教育」を行うという教育目標の下で、「特殊ノ事情」のある児童には事情を「顧慮」して教育するという、学校衛生の新しい意義ではないだろうか。もちろん、ここでの「特殊ノ事情」とは病気や虚弱のことである。その意味で、発会式の招待講演は、学校衛生の新しい方向性を示している。

特殊教育からの発想は、さらに「個性」や「養護」の議論へと展開されている。たとえば、広島高等師範附属小学校の次の論説では、「精神陶冶」では児童の「個性」を顧慮するのと同じように、薄弱児童の体育でも、体質体格に応じて適切な方法を講じるべきだという。

同校に於ては、薄弱児童の取扱を左の如く定められたり。精神陶冶に於て児童の個性を顧慮すると等しく、体育に於ても亦児童の体質体格の良否強弱に応じて之に適當する方法を講ぜざるべからず。特に身体の虚弱なる児童を他と一樣に取扱ふ時は、過度の運動或は不適當なる運動の爲め却て其發育と健康を損ふに至るべく、さりとして之を放任すれば益々虚弱となる憂あるべきを以て此種の児童に就ては体育上一層の注意を要すべし。(中略)到底正課の体操教授の能くする所にあらざるを以て、家庭と協力し医師の意見に聴きて(中略)。

一、運動の種類 (中略) 全然薄弱児童を除外するか、又は是等児童のために特に別種の運動を課することゝなすべし。例へば心臓に故障あるものに駈足角力其他激烈なる運動を課せざるが如きなり。

(広島高等師範附属小学校「薄弱児童の取扱」『日本学校衛生』第2巻第8号大正3年8月)

「虚弱」児童を他と同じに扱えば、過度な運動が健康を損うが、「さりとして之を放任すれば益々虚弱となる」

と憂いて、そのために「家庭と協力し医師の意見」を聴いて適切な「別種の運動」を課するという考えは、先の乙竹の講演と同じ、教育権保障からの教育論、健康論である。

さらに例示すれば、教育者・学校医・教育行政者が「個性」に注意を払うようになれば、「学校衛生も理想の域に達する」との議論もある。

虚弱児童の特種養護に関する現時の知見並に教育病理学研究の如きは、最も重要な意義を有するものなり。即ち特種養護や特種教育の実際の施設を行ふこと能はざる迄も、教育者、学校医並に教育行政の任に当るものが今少しく児童の個性に注意を払ふに至れば、学校衛生の進歩も理想の域に達することを得(以下略)(愛国生<sup>(30)</sup>「第三回学校衛生講習会に対する感想」『日本学校衛生』第5巻第1号、大正6年1月)

文部省に新設(復活)された学校衛生課に就いた石原喜久太郎も、学校衛生の不足点を九つに整理した際、第一に、実施場面で「個性」が認められていないことが「一大欠陥」だと指摘している。

- 一 従来本邦の学校衛生実施上には未だ各児童の個性を認めざるは一大欠陥なり。
- 二 各児童は全在学期六学年間を通じて其個性を認め健康を保護監督せざる可らず。
- 三 児童の健康状態の判定法と類別法を改めて保護法の実行に適切なるべき様なすこと。(中略)
- 五 本邦学校衛生の急務は都市にあり。
- 六 学校衛生の奏効は学校医教員理事者父兄の四者の理會協同にあり。
- 七 学校医の養成、教員の衛生知識普及の必要。(中略)

更に都市に必要な学校衛生実施上の設備として、低能児学校、林間学校、衛生幼稚園(中略)、大都市学校衛生施設は児童の体質に基きて分業的施設を完成し之を合理的なる一系統下に按排して実施するを要す(記者抄)。(石原喜久太郎述「都市の学校衛生(衛生学伝染病学雑誌第十三巻第一号)」『日本学校衛生』第5巻第8号、大正6年8月)

さらに学校衛生の「奏効」は「学校医教員理事者父兄の四者の理會協同」にあるとも石原は説いている。

## (2) アメリカ健康教育論の紹介

『日本学校衛生』誌では、『学校衛生』誌同様、健康教育がたびたび論じられている。なかでも注目すべきは、アメリカの健康教育の内容が紹介されていることである。それは、ニューヨーク教育局が1917年(大正6)から開始するという「学校衛生綱領」である。それによれば、小学校では四つの衛生事業を行い、「衛生教授」はその第二項に位置づけられている。

小学校ニ於ケル衛生事業ヲ次ノ四種ニ分ツ。

第一 教室内ノ衛生

第二 衛生教授

第三 児童身体検閲

第四 児童身体ノ欠陥観察

(中略)

第二 衛生教授

目的 児童ノ健康ヲ保護シ体力ヲ増進スル為ニ、清潔ノ習慣及摂生法ヲ教訓ス。

方法 教授ノ主要点ヲ、解剖生理ノ如キ理論ノ上ニ置カズシテ日常生活ノ實際ニ置ク。即チ頭及頭髮ヲ清潔ニ保ツコト、齒ヲ磨クコト、衣服ノ注意・勤勉・遊戯及ビ休息ノ注意等ニ於ケルガ如シ。最初ノ三年間ハ、理論ヨリモ日常生活ニ緊要ナル実践的衛生事項ヲ教フ。三年後ニハ之ト同時ニ教科書ニ由テ理論モ教ヘ且ツ一教課時間ニハ多岐ニ亘ラズシテ、一二ノ題目ニ就キ十分ナル理解ト把持トヲ確実ニス。教授シタル所ヲ確実ニ実行シ居ルヤ否ヤハ問答又ハ検閲ニ由リテ之ヲ調査ス。斯クテ児童ハ衛生上ノ良習慣ニ就テ興味ヲ感じ、己ガ実践シツ、アル個人衛生ヲ家庭ヨリ近隣、近隣ヨリ学校、学校ヨリ都市ニ及ボサシムルヲ得ベシ。衛生普及ノ為ニハ、児童ノ自治健康団や衛生班ノ組織ハ極メテ有効デアル。教師ハ教授ヲ確実ニスル為メ出来得ル限りノ手段ヲ採ルベク、殊ニ偶発事故ヲ捕ヘテ実地教授ヲ為スコトヲ忘レテハナラス。(東京高等師範学校教授 可児徳「米国紐育市ニ於ケル学校衛生綱領」『日本学校衛生』創刊五周年記念号、大正7年5月)

この「衛生教授」は、昭和初期に、「保健教育」「衛生教育」「健康教育」など呼んで移入されたアメリカのヘルス・エデュケーションそのものではないだろうか。その根拠は次の四点である。

- ①「衛生教授」の目的は「児童ノ健康ヲ保護シ体力ヲ増進スル為ニ、清潔ノ習慣及摂生法ヲ教訓ス」ることであり、教授では、「解剖生理」のような理論ではなく「日常生活ノ實際」に主要点を置き、内容を具体的に決めている(頭髮の清潔～休息の注意)。
- ②最初の三年間で、理論よりも「日常生活ニ緊要ナル実践的衛生事項」を教えた後「教科書ニ由リテ理論」を加えて教えるとして、発達段階に応じた学習過程が見通されている。
- ③一教科時間は多岐に亘らず、一つか二つの題目を取り上げて「十分ナ理解ト把持トヲ確実」にし、確実に実行したかどうかを「問答」する。そうすれば、「児童ハ衛生上ノ良習慣ニ就テ興味ヲ感じ、己ガ実践シツ、アル個人衛生ヲ家庭ヨリ近隣、近隣ヨリ学校、学校ヨリ都市ニ及ボサシムルヲ得ベシ」、と考えている。
- ④衛生の普及には、「児童ノ自治健康団」や「衛生班」という組織的アプローチが有効であり、教師は「偶発事故ヲ捕ヘテ実地教授」をすることが重要だとい

う。「偶発事故」とは、もちろん事例であり、健康教育では事例教材が有効だと考えられている。

「実践」から「理論」へのプログラムや、衛生に興味をもたせ、自治活動が有効だという点は、昭和11年に来日したアメリカの健康教育学者、ターナーが『健康教育原論』で説いている内容そのものである<sup>(31)</sup>。これまで、アメリカ健康教育を最も早く日本に紹介したのは、大正11年の論説「保健教育ニ就テ」や<sup>(32)</sup>、文部省が昭和2年に抄訳編纂した『衛生教育』だと指摘されている<sup>(33)</sup>。従って、大正7年の紹介は、極めて早いと考えられるのである。

## 5. まとめ—教育的学校衛生論の端緒—

日本初の学校衛生専門誌として創刊され、学校衛生の議論の場を担った二雑誌の内容を検討したところ、これまでの、学校衛生制度の発展史では見えない、新しい点が明らかになった。

- ①『学校衛生』誌では、「衛生教育」の必要性が盛んに指摘されている。その多くは、衛生は「修身」「道徳」「公德」だという議論である。
  - ②その一方で、もともと衛生は「科学の応用」だから、「生理学及衛生」などの知識を普通教育で教えるべき、と説く議論がある。
  - ③もう一つの『日本学校衛生』誌では、教育学者の招待講演において、「国民必須ノ教育」を行うという教育目標の下で、病氣や虚弱という「特殊ノ事情」を「顧慮」して教育すべきという教育権保障の観点からの議論に、学校衛生の新しい意義が示唆されている。この見方は「個性」や「養護」の議論にも及んでいる。
  - ④大正7年5月という、学校衛生史上、非常に早い時期に、アメリカ健康教育論が、「衛生教授」という和訳によって紹介されている。
- 以上から、初期学校衛生雑誌では、明治後期あるいは大正初期の段階で、教師の行う学校衛生、というべき議論がなされていた。その一つは、病氣や虚弱という特殊な事情をもつ児童への日常的な配慮という発想であり、これによって、教育権保障という学校衛生の新しい意義が加わった。もう一つは、衛生教育である。これまで(明治期)よりもはるかに明瞭な内容をもって議論されていて、アメリカの健康教育も紹介されていた。この二つの方向性は、昭和初期に、大西永次郎や竹村一によって展開される、いわゆる教育的学校衛生論(教育としての学校衛生論)との繋がりを示していると考えられる。

資料中の不適切な表現については、原文どおり転記することとしました。本稿の一部は、第58回東海学校保健学会(2015年9月)において発表し、本研究の一部は、JSPS科研費15K04223の助成を受けました。



## 註および参考文献

- (1) 大西永次郎『学校体育と学校衛生』（龍吟社、1941年）163～164頁、同上『教育的衛生』（藤井書店、1936年）14～19頁。
- (2) 拙著『明治期地域学校衛生史研究』（学術出版会、2014年）。
- (3) 日本学校保健会八十年史編纂委員会『日本学校保健会八十年』（日本学校保健会、2005年）34頁・488頁、文部省監修・日本学校保健会編集『学校保健百年史』（第一法規出版、1973年）251～252頁、野村良和「『帝国学校衛生会』の設立経緯に関する研究」（『筑波大学体育科学系紀要』第17号、1994年）。
- (4) 『学校衛生』はわが国初の学校衛生専門誌であり、『日本学校衛生』は、創刊時点で（大正2年）日本唯一の学校衛生の専門誌だとされている（前掲『学校保健百年史』125～127頁）。
- (5) 杉浦守邦は、学校衛生研究会の『学校衛生』誌は「感想文的な提言が多い」、大日本学校衛生協会の『日本学校衛生』誌は「学術的レベルの高い」という特徴を指摘している（『明治・大正時代の学校保健雑誌—学校保健の雑誌・史的素描—』『健康教室』第23巻7号、1972年）。
- (6) 嶋谷充子は、学校衛生研究会の「主幹」の原田長松の功績について「医学的学校衛生の中で、雑誌『学校衛生』を通して独自の教育的学校衛生論を展開していった」と指摘している（『雑誌『学校衛生』（明治36年5月～同38年9月）と原田長松』『東京大学教養学部体育研究室 体育学紀要』第23号、1989年）。
- (7) 今回、検討する対象期間は、『学校衛生』誌は終刊まで、『日本学校衛生』誌の方は、あとから発足する帝国学校衛生会より前、具体的には大正6年までとする。というのも、帝国学校衛生会（正確には、その前身にあたる会組織）の設立が提案された時（大正9年6月）、それまで学校衛生の研究と啓発を担ってきた大日本学校衛生協会は、同じような雑誌の必要性が疑われる情勢のなかで、政策提言的な活動を停止し、基礎的研究の誌上掲載に徹する方針に転換することで妥協したという（前掲『日本学校保健会八十年』34頁、杉浦前掲『明治・大正時代の学校保健雑誌』）。従って、創刊から初期の『日本学校衛生』は、そうしたしがらみもなく、比較的自由な議論の場であったと考えられるからである。
- (8) 嶋谷前掲『雑誌『学校衛生』（明治36年5月～同38年9月）と原田長松』、および『学校衛生』（第1巻第3号、明治36年10月）奥付より作成。
- (9) 杉浦前掲『明治・大正時代の学校保健雑誌』。ただし、原田家所蔵の一次史料を用いて検討した嶋谷は、会を組織したのは原田ひとりではなく、雑誌刊行についても、「関以雄も一役かっていたようである」と指摘している（前掲『雑誌『学校衛生』（明治36年5月～同38年9月）と原田長松』）。
- (10) 社末 本図生「学校衛生の過去現在—学校衛生研究会の創立運動を聞いて—」（『日本学校衛生』第8巻第12号、大正9年12月）。杉浦守邦も「原田長松の個人の設立した会で、彼の資金によって経営された」と指摘している（杉浦前掲『明治・大正時代の学校保健雑誌』）。
- (11) 嶋谷前掲『雑誌『学校衛生』（明治36年5月～同38年9月）と原田長松』。
- (12) その背景として、原田が東京高等師範学校在学中に三島通良の学校衛生の講義を聴講していた可能性を杉浦が指摘している点には注意する必要がある（杉浦前掲『明治・大正時代の学校保健雑誌』、嶋谷前掲『雑誌『学校衛生』（明治36年5月～同38年9月）と原田長松』）。
- (13) 杉浦前掲『明治・大正時代の学校保健雑誌』。また、「稟告」によれば、理事として「医学博士」5名と文部書記官、東京

- 高等師範学校教授および文部省学校衛生取調嘱託の各一名を決定し、さらに、「内務省」から三名と「教育家」から二名にも委嘱中だという。実質的な設立者本図晴之助は、井上晴之助という名前で、「常務理事」と記されている（『稟告』『日本学校衛生』第1巻第3号、大正3年6月）。役員には医家・衛生行政・教育家・教育行政の重鎮がバランスよく選ばれている。
- (14) 杉浦前掲『明治・大正時代の学校保健雑誌』。本図は、明治36年2月に東京府北豊島郡豊川小学校第13代校長に就任していたようである（現東京都北区立豊川小学校HP、2015年8月アクセス）。
  - (15) 「寄稿要項」、「会員諸君へ申上候」『日本学校衛生』第1巻第7号、大正2年10月。
  - (16) 杉浦も、『日本学校衛生』誌の雑報欄の情報の幅広さを指摘している（前掲『明治・大正時代の学校保健雑誌』）。
  - (17) 「教師は学校衛生を講明し且つ普及する」と説くこの巻頭言の筆者は不明である。ただし、別の論考で、関以雄が「吾人は繰り返して謂ふが、学校教師は衛生を講明する責任がある」と同様の持論を繰り返しているの、筆者は関ではないかと思われる（「本年上半季間に於ける全国八種伝染病発生の状況に就て」『学校衛生』第1巻第5号明治36年9月）。
  - (18) 筆者名の「天籟道人」とは、「天籟 関以雄」と書かれる場合もあるので関以雄だと思われる。（天籟 関以雄「久木田氏の質問に答ふ」『学校衛生』第2巻第12号明治38年8月）。
  - (19) 天籟道人「健康と良習慣」（第1巻第3号、明治36年7月）、著者不詳「興行物と衛生、徳育との関係」（『学校衛生』第3号、明治36年7月）、石原喜久太郎「小学校教員諸君の衛生講話に就て」（第1巻第10号、明治37年2月）、衛生局長 窪田静太郎「郡視学講習会に於て」（第3巻第1号、明治38年9月の附録『衛生講話速記録』）。
  - (20) 明治37年開催の第22次大日本私立衛生会総会かと思われる、明治37年中に発行された『大日本私立衛生会雑誌』を検索したが、この講演記録は見当たらなかった（日本公衆衛生協会CD版、および京都府立医科大学附属図書館蔵の同誌）。
  - (21) ちなみに、科学の知識と実践力の両面から学習課程を重視する、アメリカ移入の衛生教育の考えが全国的に支持されるようになるは、後節で述べるように、昭和初期のいわゆる健康教育ブームの時である（拙稿「大西永次郎の健康教育論—大西の『衛生訓練の実際』とターナーの『健康教育原論』の検討—」『愛知教育大学保健体育講座研究紀要』第38号、2014年）。
  - (22) 『学校保健百年史』によれば、明治25年の「尋常師範学校ノ学科及其程度改正（明治二五・七・一—文部省令第八号）」では、男子生徒に課される学科「教育」において「学校ノ設置編制設備管理経済衛生等ノ方法」を授けることや、「博物」中の「人身生理」において「身体ノ構造生活ノ機能及衛生上重要ナル事項」を授けることになっている（前掲『学校保健百年史』19～20頁）。さらに明治40年の「師範学校規程」において、師範学校の本科第一部生徒の履修する「教育」に「学校衛生」が含まれ、「博物」において「人体の構造、生理及衛生ノ大要」が教授されるようになったという（同上、62～63頁）。
  - (23) 「衛生学科目設置の建議」（『学校衛生』第1巻第3号明治36年7月）。
  - (24) 発会式の様子は『医海時報』に報じられている（『学校衛生協会発会式』『医海時報』第975号、大正2年3月）。
  - (25) 「本誌創刊ノ意味モ亦此三篇ヲ通ジタル意味ニ外ナラズ揚げて以テ創刊ノ辞ニ代フルコト爾リ」（『創刊ノ辞』『日本学校衛生』第1巻第1号、大正2年4月）。
  - (26) 辻新次は、明治期の教育行政家、初代文部次官。信濃松本



藩士辻漸の二男に生まれ、漢学、蘭学、仏学、化学を学び、明治維新後は、明治5年に大学南校校長となる。また、明治4年の文部省設置とともに入省し、学制起草、教育令施行に文部次官として尽力した（日蘭学会編『洋学史事典』1984年）。

- (27)「貴誌と同様の雑誌あり内容もなか〜見事なりしが読者範圍衛生家に局限せられ予期の如く目的を達し難かりしやに伝聞せしこと有之候。小生の貴誌に対する感想は、實際教育衛生家の学校衛生論壇となり其の研究したる結果をば直に以て学校教育の實際に応用せられたきものところ存候」（陸軍一等軍医正 田中弥太郎「衛生家と教育家との協力を乞ひ遠足時に於ける注意を望む」『日本学校衛生』第5巻第6号、大正6年6月）。
- (28) 三島通良『学校衛生学』（博文堂、明治26年）18頁、266頁。
- (29) 拙著前掲『明治期地域学校衛生史研究』156頁。
- (30)「愛国生」とは本図のペンネームであろう。
- (31) 拙稿前掲「大西永次郎の健康教育論」。
- (32) 七木田文彦『健康教育科「保健科」成立の政策形成』（学術出版会、2010年）25頁。
- (33) 森本稔「日本学校衛生史（その3）昭和前期の学校衛生」（『学校保健研究』第12巻第6号1970年）、同上「昭和初期の学校衛生（1926年～1945年）」（『天理大学学報 体育篇』第10号、1971年）、田辺信太郎他「「健康教育」の概念に関する一考察－昭和10年代前半の文献を中心として－」（『東京大学教育学部紀要』第23巻1984年）。

（2015年9月10日受理）